

どこか気になるヨーロッパの都市③

リヨン（フランス）

—— 過去を忘れた街の過去 ——

高橋 哲雄

「フランスの大阪」？

初めてリヨンの街を訪れたとき、ここに幾度も足を伸ばす回り合わせになるうとは思いませんでした。

南東フランスの中心都市。二つの丘を背負い、二つの大河の合流点に開けた明るい風景の、美しいと言ってよい街であるけれど、どこかあっけらかんとした印象で、「気になる」何かを秘めていそうには見えなかった。

もう四〇年以上も前になるか、このときは特別な目的、テーマを抱えての旅ではなく、フランス周遊の途次で立ち寄ったにすぎない。当時私のリヨンについてのイメージといえば、古代ローマ以来の、ガリアの首都でもある格式と歴史を持ちながら、近世以来絹織物と金融で

富裕となったことから、古代・中世の影がすっかり薄れて、マルセイユとフランス第二の都市の座を競う「経済都市」化してしまった街というところだった。

じつは町が発展の頂点にかかった一九世紀の三―四〇年代に二人の卓越した都市ウォッチャーがリヨンを訪れている。その一人、チャールズ・ディケンズは一八四四年、イタリアに向かう旅の途上でリヨンに立ち寄り、こう言っている。

すべての工場町が溶け合っただけになったとしても、リヨンが私に与えたような印象を与えることはまずないだろう。というの
は、そこでは、排水設備がなく、清掃されることもない外国の町

が持っているすべての性質が、その土地の工場町としてすでにそこにある悲惨さの上にさらに接ぎ足されているかのように思えたからであると（伊藤弘之・下笠徳次・隅本貞広訳『イタリアのおもかげ』）。

悪名高いイングランド北部繊維工業地帯を知りつくしている彼がそう言うのであつてみれば、どんなひどいところだったかと思つて当然である。

もう一人、スタンダールは、一八三七年初夏に一月足らずリヨンに何度目かの滞在をしたさいくりかえし、この「土地の神様はお金という神様」であると言ひ、美的感覚の欠如と信心深さの同居を語つてゐる（山辺雅彦訳『ある旅行者の手記』）。

彼らの時代からは長い時間がたち、街はいま穏やかで落ち着いたたずまいを見せているが、彼らに代表される経済都市というイメージがやきついていたせいか、当時の私にはあまり面白味とか奥深さを感じられそうな土地柄には見えなかつた。

「大阪のような都市ですよ」といふ駐在経験者がいた――

「難波の都以来の古い歴史と、近世に入つての『天下の台所』としての実力と伝統を誇る町人の町だったのが、近代になつて、絹と綿の違いはあるが糸編の工業町にもなり、『水の都』とか『煙の都』と呼ばれるようになったところも同じだし、食い倒れで有名というのも似ていますよ」と。

ああ、そういうえば、という消息通もいた――「大阪には旧制の三高が来るはずだったのに、学校なんか商売の邪魔になると財界が反対したため京都にとられました。シャルル七世のとき（一五世紀）やはり実業には学問が要らないとして大学を誘致し損ね、モンペリエやグルノーブルにも遅れをとつたりリヨンにそっくりじゃないですか。一九世紀にできた大学は医学部で有名だというのにも似ていますよ」。

「フランスの大阪」説とは別に、もうひとつ私の知識の範囲にあつたのは、ここが永井荷風と遠藤周作にゆかりのある土地で、彼らの作品にも登場していたことである。

いや『世界』その他の総合雑誌で健筆をふるつていた同地在住の瀧澤敬一の「フランス通信」（のち岩波書店から刊行、一〇巻）は、若いとき愛読したもので、もしかしたら、個人的には、これがリヨンの名に親しみをもちたいちばんの理由であつたかもしれない。

では荷風や遠藤、あるいは瀧澤はなぜリヨンと縁ができ、そここのつながりから何を得たのだろうか。その辺から話をはじめよう。

荷風のリヨン――その背景

永井荷風は一九〇八年にリヨンの地を踏み、八月を過ごした。横浜正金銀行リヨン支店の雇員として滞在したもので、やがてそれは帰国後の出世作『ふらんす物語』（初版一九〇二年、発行禁止）に結実する。



フルヴィエールの丘からのリヨン市街。手前がソーヌ河、向うがローヌ河

荷風は十八歳で東京外国語学校(東京外国語大学の前身)に入学したものの、文学以外に興味を持たず、学校にも出ないでぶらぶらしていた。日本郵船の重役で横浜支店長であった父久一郎は息子の将来を案じて「実学」を学ばせようとアメリカの某日本商店に送ったが、仕事に身に付かず、勝手に転職する始末。親交のある正金銀行の頭取に頼みこんで同行のニューヨーク支店に入れてもらった。しかし、仕事には身が入らず、好きなフランスの小説に読みふけては、芝居見物や音楽会に熱中、はては娼婦にいれあげ、四年たってもフランスへのあこがれが募るばかりの状況を聞かされた父は、いつそ好きなフランスにやれば社会人として立ち直るかもしれないと半ばあきらめ半ば期待して手を回したのであった。しかし荷風はフランスに行けたことは「感激極めて殆ど云う処を知らず」と日記に記したものの、ぐうたら銀行員ぶりは変わらなかった。

リヨンという土地への荷風の思いは微妙であったろう。『ふらんす物語』に見るリヨンは決していやなところでも住みにくいとこでもなかった。たとえば次の一節。街の背後の二つの丘の一つ、クロワールースに上った彼は――

切開いた崖の上に出ると、おお！ リヨンの全市、ローン地方の低地、皆一眸の中にあり。帯のごとく曲るローンの水の、遙か限界に消えるあたり、広い広い地平線の上には、連なるアルプの山脈が晴れ晴れと現われている。自分は、この限りもない空間の偉

大を望むや、忽ち冠っている帽子をとり、何を目当てにするともなく、幾度か敬礼しつつ歩いて行った。

といったふうには、至るところでこの町の美しさや親しみ深さへの賛歌をうたい上げている。しかし、すぐそのあと次のようにもいう。

自分は夏中夕暮に散歩したソーン河畔の美しい景色を思い浮べた。冬の来るのが、如何にも辛く悲しく感じられる。年中、同じ狭い室の中に閉じ込められ、同じ銀行の帳簿を、同じように繰りひろげている身の上がつくづく厭になった。外国にいるとはいへ、狭い日本社会に棲息しては、東京の天地に逼塞しているも同じ事。自分は今もつりヨンに飽きた。

彼のフランス滞在のうちパリにいたのはひと月に満たず、それでいて『ふらんす物語』中のパリに関する記述はリヨンよりはるかに多い。彼の愛するフランスとはゾラやモーパッサン、あるいはボードレルの、崩れ廃れた下町の広がるパリだったのである。

ただここでひとつ、あまり知られていない事実を記しておきたい。

彼の愛してやまないボードレル（訳詩集『珊瑚集』の冒頭八篇はボードレルの詩で占められた）は、実は少年時代の四年間（一八三三—一三六）をリヨンで過ごしていること、それは母の再婚相手（義父）が陸軍の高級将校で、当時リヨンで起こった絹織職人の反乱鎮圧の指揮官

としてパリから派遣されたことによるということ、そしておそらく荷風はそのことを知らず、ボードレルをリヨンと結びつけて語ったことがないし、ボードレルの旧跡を訪ね歩いた形跡もないこと、がそれである。ボードレルはリヨンが好きでなかったようで、のちに

奇妙な都市だ。信心に凝り固まっていて商業が栄え、カトリックでプロテスタントであり、霧と炭塵に充ち、そこでは観念は解きほぐすのが難しい——脳髓が鼻詰まりを起こしている

と、同じ頃リヨンに滞在したスタンダールに似た印象を回顧している（クロード・ピショワ&ジャン・ジグレル、渡辺邦彦訳『シャルル・ボードレル』）。このボードレル少年のリヨン体験の意味を掘り起こして、彼が『悪の華』における芸術至上主義的な美の追求から離れて『パリの憂愁』における「民衆派」的な正義と真実の詩への志向が、弾圧者の息子であった屈折の多いリヨン時代にさかのぼって読み直すことができるという解釈が近年現れたことを紹介しておこう（山田兼士『ボードレルの詩学』）。

こうして荷風はリヨンを去る。彼が去って二年後同じ銀行の同じリヨン支店に着任したのが若き瀧澤敬一である。彼は語る――。

着任早々金庫を預かる身となり、中を掻き回して見ると、月給領

収帳が出てきた。——少し古い所に「Nagai 三百五十法」と記入した頁がある。これが名にし負ふ天下の文豪、永井荷風先生の前身で、支店長の話を書く、紐育でぶらぶらして居り、困るからと頼まれ雇ったのはよいが、出勤しても朝から晩まで小説に読み耽り、勘定は間違えてばかり居るし、これは銀行向きではあるまい、とて帰って貰ったと云ふことで、こつちの御蔵にもやや火がつきそうな形勢であつた(『続フランス通信』)

灌澤自身はというと、銀行勤めにもリヨン暮らしにも適合した。六年後に地元の女性をめぐって土地に根を下ろし、第二次大戦の間も戦後の混乱期も潜り抜け、その間地の利と銀行の情報収集力を使ってパリからではとても聞くことのできない、当時は稀な、独特の切り口と生きのよさを具えたフランス事情を発信し続けた。

「シトワイアン」と「ブルジョワジー」の街

彼らがともに身を置いた横浜正金銀行とは、UFJ三菱東京銀行の合併前の片割れである東京銀行の、さらに前身である。

明治初年に外国為替業務を扱う唯一の金融機関として設立され、日本の対外取引の金融面を支えてきた。フランスと日本の貿易関係の最大の柱は生糸・絹織物であることから、正金銀行のフランス支店(當時は出張所)はパリではなくまずリヨンに設けられた。リヨンが十六

世紀以来フランスのみならずヨーロッパきっての絹織物業の中心地であつたことは、現在見る事ができる織物史美術館のおどろくべき豊饒なコレクションからも覗うことができよう。ここはヨーロッパの数多いすぐれた工芸美術館のなかでも屈指の見どころである。西陣織の名品も、京都よりむしろここでまとまった形で鑑賞することができる。

一回目の訪問のときは知らなかつたことであるが、明治二年(一八七九)に京都府庁から十七歳の留学生稲畑勝太郎がこの工業学校に送られている。京都府からはすでに西陣織の職人三人が数年前に派遣されて、ジャガード織機などの最新技術を持ち帰っていた。リヨン大学に進んで応用化学を学んだ稲畑は六年後に帰朝、染色加工業の指導的立場に立ち、のちの稲畑産業を創始し、京都・大阪財界の雄となる。彼はまた明治三〇年(一八九七)にフランスから持ち帰ったシネマトグラフで日本最初の映画を大阪で上映したことも知られる。リヨンは映画発明者リュミエール兄弟の生地であつた。荷風のリヨン滞在より一〇余年以前のことである。

シルクは確かに近世フランスを代表する産業であつたけれど、経済都市リヨンの地位はもつと以前、中世の大都市に由来する商業・金融都市としての繁栄によるところが大きかった。それは、もちろん一義的には地理的な利便を反映している。リヨンはパリやその他の中心地よりはスイスやイタリアに近かつた。パリへは四六一キロ、ローヌ河を下った河口のマルセーユには三一五キロ、しかしジュネーブにはロー

又河をさかのぼってわずかに一五二キロ、またイタリア国境におよそ二五〇キロで、トリノへは三二〇キロで到達できる。それどころか、中世から近世にかけては神聖ローマ帝国との国境、いや十四世紀にはその版図内に属しさえしていた。独仏国境の街で帰属が絶えず入れ替わったストラスブルに似た立地状況があったのだ。

ルネサンス期までのイタリアはヨーロッパ世界の最先進地であり、リヨンにも年四回の大市に商機を求めてイタリア商人が集まってきた。リヨンは「イタリアの出島」であり「フランスのフィレンツェ」と呼ばれた。ドイツの有力商人も住みつき、十六世紀中頃には「為替・大市・商品においては、アントワルペンもヴェネツィアもリヨンの評判にはかなわない」と言われるまでになったのである。その財力に眼を付けられ、重税を負担させられて「国王の金庫」との異名をとった。マルクスの『資本論』でおなじみの、フランス最大の銀行クレディ・リヨネも当地の看板企業である。

大市の国際的ネットワークを生かして出版・印刷業も発展した。リヨンはヴェネツィア、パリに次ぐヨーロッパ第三の出版センターとしてヨーロッパの各地に書物を送りだした。政治行政の中心でなく、大市も高等法院も、大修道院もないのに、突出した出版都市でありえるというのは異例のことである。どこの国にもこんな都市はない。イギリスではエディンバラがそれに及ばぬとしても、やや近い出版都市であったが、あそこには古い大学もあり、独特の法制度を背にした法律機関があり、旧王国の首都でもあった。

フランス・ルネッサンスの、書物の文化としての側面を語って余すところのない快著『本の都市 リヨン』の著者宮下志朗によると、パリの出版社・印刷所がセーヌ左岸の大学街カルチエ・ラタンに根を下ろしたのに対して、リヨンのそれはソーヌ左岸、ローヌ河にはさまれた「半島」と呼ばれる細長い三角州の商業地域、とくにその名もメルシエール（金銭づく）街という街区に陣取った。宗教書・学芸書はもちろん主力書目に挙げられ、なかには「当地作家フランソワ・ラレーの『ガルガンチュア』の刊行などもあるが、パリとの比較でいうとラテン語本よりはフランス語本に、したがって実用書、手引書にぐっと比重がかかっていた。

宮下のいうところでは、本の出版に使命感を抱いていたというよりは、「他の商品も扱っていた豪商が携わる割のよいビジネス」の性格が濃かったようである。まさに「メルシエール」街の産物であった。ジュネーブに近いところから、宗教改革派（カルヴァン派）の出版も手掛けはしたが、次第に低コスト生産が可能で、カトリックの書物も出版が奨励されたという商魂たくましい、「資本主義の精神」を絵で描いたようなジュネーブに太刀打ちできなくなり、十六世紀末には出版王国の命脈は尽き果てたのである。

街は二つの河をはさんで大きく三つの地区に分かれる。まずソーヌの右岸の急斜面とその下の狭い帯状空間を占めるのが、中世以来の旧市街（Vieux Lyon）である。大聖堂、裁判所、為替広場など、「シテ」（cité）を構成する建築が並び、「シトワイアン」（citoyen）に当

たる人々、すなわち豪商、銀行家、法曹階級、医師などの邸宅が軒を連ねた。「市民」と普通訳されるこの言葉に、私はどうしても古代ギリシャ以来の、市政に関わりうる限られた人びとのイメージを、歴史的用法としては嗅ぎ取らざるをえない。

左岸は商工業地域で、上流のクロワ・ルースの丘の斜面は絹織の親方や職人の仕事場と住居で、下流の「半島」に当たる平地部分は劇場やホテル、商店街の商業地域で占められた。出版・印刷業もここにあった。ここはまた、神聖ローマ帝国の領内に属する時代もあったことから、「帝国」サイドと呼ばれた。国王や司教によって特権が認められたフランス王国側のシテとは区別される「ブル」（bourg）すなわち市の立つ大きな村に当たり、「ブルジョワジー」（bourgeoisie）すなわち商工業者、親方層の領界であった。正金銀行の支店は「半島」の商業地域にあり、荷風はそこからローヌ河を左岸に渡った新しく開けた郊外住宅地に下宿していた（加太宏邦『荷風のリヨン——『ふらんす物語』を歩く』）。

しばしば「市民階級」として一括りされるけれど、シトワイアンとブルジョワジーは、このように、まったく同じではない。リヨンではそれが場所的にくっきりと分かれて示された。ローヌ右岸の秩序と安定のシテ＝「王国」から、左岸の活気と反乱のブル＝「帝国」、そしてローヌ左岸に十九世紀以後開けた、いわば番外地の郊外とに。橋を渡るということは、ここでは異界に分け入ることであった。

『白い人』の意味するもの

遠藤周作の『白い人』は、この三つの世界の行き来の物語と読むこともできる。

主人公のリヨン大学の学生、「私」は斜視でみにくい容姿に生まれ、父に疎まれて育った。父はクロワ・ルースの繊維工場主で遊び人。ドイツ人でカルヴァン派の母はそれに反発して情欲を抑圧する育て方を「私」に強いた。

しかし、「私」はひそかに少年愛や、老犬をいじめる女中の白い腿に加虐的な悦楽を覚えていた。大学でフルヴィエールの神学校生ジャックと彼に信仰の道に引きずられている従妹マリー・テレーズを知り、ジャックのヒロイズムと犠牲精神に反発して、マリー・テレーズを誘惑する。さらに占領下のドイツ秘密警察の手先になって、レジスタンス運動家の拷問にひそかな悦びを感じていた。抵抗運動に身を投じていたジャックが捕えられたが、いかなる拷問にも口を割らないことを知った「私」は修道院に入っていたマリー・テレーズを取調室の隣室に連れ込んで性的に苛むことで、ジャックを落とそうとした。結果は「私」の予想とちがってジャックは舌を噛んで自殺し、それを知ったテレーズは発狂する。リヨンの街は退却するドイツ軍の放火で炎上していた。

さて、この、いささか図式的な——と、芥川賞選考のさい、選考委員の山本健吉はいう——筋書きの物語を市街図のうえにプロットしてみよう。

「私」が生まれ育ったのはブルジョワ＝商業地区である。大学はローヌ河を左岸に渡った新開地にあり、そこでシテ＝旧市街の人であり、カトリック教会に属するジャックとマリー・テレーズに出会う。

リヨン大学は十九世紀末になって初めて設立された、フランスでは後発の大学である。前述のように、ルネッサンス期に全土で大学創設熱が高まったとき、「商売に学問は不要」としてリヨンは素通りされた。その結果、大学は旧市街の、権威と秩序を代弁する地区ではなく、新開の、いわば番外地——ニユートラル・ゾーン——に立地することになり、異なつた出自の若者の接触機会が生まれる。

ナチス・ドイツの占領に伴い、ゲシュタポの本部は旧市街に置かれ、対するにレジスタンス側は半島側、とくにクロワ・ルース一帯を抵抗の拠点とした。シテとプールの間には支配・抑圧と反抗・暴動の契機が入り込んだ。「私」はプールの裏切り者であり、ジャックは旧来の秩序を代弁する側に属しながら、外来支配者には反逆のサイドに身をおくという関係が生まれたのである。

「レジスタンスの首都」

遠藤がリヨンを小説の舞台に使ったのは一つにはリヨン大学に留学し、一年半をここで送った縁があったからである。もう一つの理由はここがのちに「レジスタンスの首都」と呼ばれるほどの戦時下対独抵抗運動の拠点であったことにある。

年輩者の記憶には刻みつけられているだろうが、ロベール・ブレッソン監督の秀作映画「抵抗——死刑囚の手記」(一九五七)は一九四三年、抵抗運動下のリヨンでの実録ものである。また、アナール派の歴史家としてリュシアン・フェーブルと並ぶ存在であったマルク・ブロックはリヨンの生まれで、この街の抵抗運動の指揮者となり、一九四四年ゲシュタポにつかまって銃殺された。一九四〇年の西部戦線の敗北を総括し、融和政策を糾弾した彼の『奇妙な敗北』(一九五五)は翻訳当時日本でも広く読まれた。ついでながら、この第三大学はジャン・ムーラン大学といい、私のような食いしん坊は先年まで神戸にあった名レストランの店名の連想から、ついグルメ都市リヨンのことであれば、名シェフの名でも冠したのではと、あらぬ想像に及んだりするのだが、このジャン・ムーランは抵抗運動の闘士なのである。

なぜここがレジスタンス運動の中心になったのか。イタリア、スイスに近い交通の要衝であり連合国側と連絡が付けやすい、アルプスを控えて潜伏にも条件がよいといった地理的条件に加えて、ナチス支配下のフランスで当初自由地域内であったこと、さらには独特の歴史が作り出したリヨン人気質があったかもしれない。

主力産業である絹織物の職人が「大食らい団」(賄い付き雇用からの名)といった団体を結成するなど、強力なまとまりがあり、また出版・印刷の職人たちも「誤植の殿様」といった山車を祭にはかつぎだすなど、ある種知的でうるさいグループを形成していた。「無軌道の僧院」といった祝祭団体も数多くあった。そんな名前の団体がやたら

まかり通っている都市がほかにあろうか。大市を成り立たせてきた自由自尊の気風が抑圧者への絶えざる反抗や騒乱の土壤となる。ここが人種的にも多様な、「帝国」と「王国」の一種の「国境の町」であったことも、問題発生を刺激する要因であったし、精神風土を語る上で無視できない。対するに、占領ドイツ軍もまたここを中心の拠点としたため、両者の衝突は必至のものとなった。

ただ、戦中のリヨンの抗独レジスタンスへのスタンスについては微妙な二面性があったことも指摘しておいた方がよさそうである。市井人の動向についての貴重なインサイドレポートである瀧澤敬一の報告からは、レジスタンスの闘士が救世主というより厄介者視されていた側面もうかがえる。「山賊」といった表現も飛び出して、リヨン市民のしたたかな現実目線からすれば、行きつくところは明白だのになぜ犠牲者をふやすのか、巻き込まれるのは近所迷惑だという見方も少なくなかったようである。マルク・ブロックの融和政策批判にしても、当時は少数派であり、英仏ともに圧倒的に融和路線のほうが支持されていたのである。

トラブール——迷宮の通路

「レジスタンスの首都」をつくったのはリヨン人気質ばかりではない。リヨン歴史地区、ことにクロワ・ルースの街区に数多く見られる、ある独特の空間も彼らの活動を助けた。それが「トラブール」

trabouieである。

これは建造物ブロックのなかを抜けて二つの表通りを結ぶ洞穴状の路地とでもいえばよい。ラテン語の俗語で「通り抜け」の意味だといいい、多くのばあい途中に中庭に当たる空間がある。似たものは他の都市にもあるが、よく比べられるのは、パリの有名な十九世紀初め以来の「パッサージュ」 passage convertie 群で、高級商店が装いを凝らした軒を並べる優雅なアーケードの遊歩道になっている。しかし、リヨンのトラブールはこれとは相当に性格を異にする。

どこがちがうか。まず形からいえば、通路に屋根を被せただけのパッサージュとちがって、トラブールは建物に通路をいわば割り抜いて造られた。そのうえに入り口には扉まで付いているのが通例で、隣り合う家や店の入り口とまぎらわしく、土地の人でないと区別がつきにくい。道があるのか、どこが通路になっているのかも、余所者にはわかりにくい。遮蔽度、密閉度の高い空間をつくっている。これがまづゲシュタポへの眼くらましになる。

路地に入るとこれがまた、ふつうの真直ぐな通路とは限らない。リヨンは坂の多い町であるから、まず階段がある。坂もある。中庭があり、途中で道が曲がり、枝分かれがある。中庭からはそこに面したいくつもの住戸に入りりできるし、上の階に通じる外階段や廊下もあり、トンネルの途中にも家の出入口も別のトラブールへの出入口も、区別がさだかでないままに並んでいる。つまり、どこにでも通じ、ときにはどこにいるかわからなくなる。中庭には何層にも及ぶらせん階



トラブールの歩廊と外階段



トラブールの中庭。らせん階段、歩廊、井戸をもつ

段の窓やバルコニー（歩廊）から無数の住民の眼が通過者を監視することができると、通過者は、逃亡者がどこに消えたかわかりにくい。カスバ（アルジェ）というカッパドキア（トルコ）の洞窟都市のような迷宮性といってよいが、ドイツ軍にとってはやりにくい空間的条件であったことはまちがいない。

トラブールはかつて五〇〇を数えたが、いまでは相当減っている（リヨンの公式サイト）。三〇〇たらずとか二四〇とかさまざまに言われるが、そのほかにトラブールでない路地も多い。最初はトンネルでもいつの間にか屋根のない路地になり、林に入ったと思えば、かつての大商人の館の裏庭に迷いこんでいる、といったことが少なくなっている。歴史都市リヨンの、いわばスケスケの自由さと奥深いわかりにくさの両方を、象徴しているかと思う瞬間である。

トラブールが出来た時期はさまざまで、早いものは中世にさかのぼるようだが、いま旧市街に残っているのはルネッサンス期のものが多く、とくにローマ風のパティオをかたどった中庭には井戸もあり、階段やバルコニーは多くイタリア・ルネッサンス風で、ここの金融業者や大商人の最大のグループがフィレンツェやジェノヴァなどイタリア都市の出であったことを物語る。ふつとジュリエットが顔をのぞかせそうな気がしたりもする。

これらが、最初はフルヴィエールの丘の斜面からソーヌの河岸への近道としてつくられたものであったのに対して、クロワ・ルースのより新しいトラブール群は絹織職人や親方の住居と工房をつなぎ、さら



トラブールのイタリア・ルネッサンス風
らせん階段。

に製品の長い織布を雨にぬれずに、かつ一説によれば、人眼にふれてデザインが盗まれないようにローヌ河岸まで運ぶためにデザインされたといわれる。

また一九世紀初めにリヨンの人ジャカールが発明し、たちまち広まったジャカール織機は背が高いため旧市街の工房では収まりきれぬところが多く、天井が高いクロワ・ルースのあたらしい建物ブロックへと、仕事場も職人住居も移っていった。このトラブールはもはや単なる近道ではなく、シルクの作業・運搬ラインというあたらしい用途を果たすことになる。もっとも、さらに進んで職人の反乱や抗独レジスタンスの格好の拠点に役立とうとは思ひもしない効用であったろう。「建物には効用と美がある。効用は所有者に、美は万人に属する」

(ヴィクトル・ユゴー)というが、この場合「効用」もまた、万人とはいかぬまでも多くの人びとのものとなったといえよう。

その「美」の側面であるが、トラブールはふしぎな魅力を発散する空間をつくった。まるで後期ゴシックの聖堂に入ったような支柱、壁面、とくに天井アーチのトンネル通路があるかと思えば、中庭では、窓枠(マリオン窓)、彫像などの飾りはいうに及ばず、とくにらせん階段の塔屋や歩廊のデザインに至っては、どうしてこんな目立たない場所にこれだけの贅をこらした建造物を営々とつくりつづけたのかと驚かざるをえない。そこにリヨン人に特有の気質を読みとれないだろうか。瀧澤敬一は言う。

良賈は深く蔵するの類で、有名な商店は裏通りなどに隠れ又決して広告をしない。近郊に住む重役階級は町外れで自用の馬車を乗り捨て電車でオフィスに通勤した遺風が今でもいくらもある。住宅は外観を粗にして室内を飾り、着物も裏地に金をかける。——金はあつてもない振りをする。こんな気風が漲っているから、他国人にはちつとも面白くないが、フランスのバックボーン的一端はこんな都会を貫いて居るものである(『第九フランス通信』)。

トラブールは裏小路か

ここですこし、トラブール歩きもじりじりで、蛇足的考察に迷い込む。ある荷風研究者は『ふらんす物語』から「日和下駄」、『溼東綺譚』

を貫く彼の文学の核心にある裏町志向にリヨン体験 とくにトラブールから得た靈感を見ようとする（赤瀬雅子『ふらんす物語』試論 リヨンのトラブールを背景とした物語の成立について）桃山学院大学人間科学 21。なかなか誘惑的なアイデアであり、興味をそそられるが、議論としては成り立つかどうか。

第一に彼女は荷風の文中の裏町・小路・路地の類をトラブールと取り違えてはいまいか。彼女の引用した荷風の文を見よう。

鼠色した古い壁塗の人家は、雨に濡れたまま、灰色の空の下に蹲踞っていて、その窓窓は、盲人の眼のように、何の活気も、何の人氣もない。こういう横町には、よく、かつてお客の這入った事のないような、荒物屋だの、古時計店なぞいう小店があるが、その真暗な、燈を点さぬ店の中には、必らず、リユーマチスで、手の動かぬような老婆がチヨコンと張番をしている。人通りといつては、折々身なりの見すばらしい女が、洗濯物なぞを入れた手籠を片腕に引掛けて、大通りから大通りへと、早足に抜道をするばかり。——やがて、一時小止みしていた寒い時雨が、はらはらと降出す、にもかかわらず、こういう裏街、車や馬の危険のない裏町ばかりを彷徨う盲目の音楽者が、何処からともなく歩み出て、音のわるいピオロンの調に、暮れ行く四辺の淋しさに又一層の哀れを添えしめる（「秋のちまた」）。

こういう通りを赤瀬はトラブールであると読むのだが、そうでないことは、これまで述べてきたトラブールの特徴からもあきらかだろう。トンネル通路のそこには小店もなければ盲目の音楽師が入り込んでヴァイオリンを聴かせることもまずない。扉の内部は住民のほかは通り抜けの人だけであり、それは、イギリスで私有地のなかを通り抜けが慣習法上認められているパブリック・フットパスに似ている。ここでは住民の仕事や井戸端会議はよいが、外部の人が営業をやったりすることは許されない。中庭を除いては天井があるのだから時雨がかったりもしない。荷風の路地はパリの屋根付きパッサージュでもリヨンのトラブールでもなく、どこの都市にもあるふつうのパッサージュとかアレーと呼ばれる（リヨンでもそう呼ばれている）風雨にさらされる露天の、文字通り露路なのである。

赤瀬はまた、荷風が再三登場させるバルコンをトラブールのバルコンの同定している。しかし、トラブールのバルコン群の多くはリヨンの富と気風の象徴といつていい、金のかかった壮麗なもので、引用文に見られるような、うらぶれた路地には、とてもではないが、似つかわしくない。前後の文脈からいっても、このバルコンは、路地を出て大通りに、そして下宿に帰った荷風が耳にした自室の外の「バルコンに滴る雨の音がわけもなく人を泣かせる」と読むのが自然と考える。

ここで赤瀬の説を持ち出したのは、批判が目的ではなく（赤瀬も「試論」と断っている。この人は読ませる文章を書く）それを枕に使わ

せてもらうことで、トラブールにまつわりがちな誤解を解きたいと考えたからである。

あるユートピアの中心

二度目にリヨンに来たときはこのトラブールめぐりが課題の一つであった。一九九八年にリヨンの歴史地区（旧市街とクロワ・ルースの双方を含む）が世界文化遺産に指定される少し前のことで、ガイドブックも地図もほとんどなかった。

私はミシュランの『ローヌ河谷』（フランス語版のみ）の圧縮された、しかしミシュランらしいよくできた地図をもっぱら頼りに、リヨンの女性の足首を太くさせたという（リヨン名物は霧とソーセージと女の太い足首）歩きにくい丸石の舗道をせつせと歩いた。シャルル・フリーエ（一七七二―一八三七）の名を知ったのはそのときである。

クロワ・ルースの丘の麓、トロワ広場近くにあったと思うのだが、ある本屋で、いかにも本好きを姿にしたような店主と出会い、リヨンにゆかりの面白そうな人の本はないかと訊ねたら、その答えがサンテグジュペリとフリーエなのであった。どちらの著作集もそろえてあった。どちらもが幻視者のなどころのある人なのが意外であった。

『星の王子様』、『夜間飛行』のサンテグジュペリは、第二次大戦中哨戒飛行中消息を絶った国民的英雄としても有名で、リヨン生まれ。たぶんそのときすでにリオン空港は彼の名を冠していたし、新幹線の

駅名もそうになっていたように思う。

フリーエはそれほど著名ではない。

彼の名は、長く大学生の定番読書アイテムであったエンゲルスの『空想より科学へ』で知っていた。サン・シモンやオーウェンと並ぶ空想（ユートピア）的社会主義者の一人として、自分とマルクスの唱導する「科学的社会主義」のいわば露払い役のかたちで紹介されていたというのが大ざっぱな印象である。しかし、リヨンと縁がある人とは知らなかった。店主によるとフリーエは若いときリヨンで働き、彼の思想の骨格が形成されたのはここでのことだったという。「けた外れのスケールのある興味深い人物だね。いろいろ面白いことを言っているが、そのどれもがリヨンのものだ」と彼は含み笑いをしながら言い、何がリヨンのかは答えなかった。私は店主が教えてくれた英文の伝記を買ひ、帰りの機内で取り組んだが、持参したポケット辞書では細かいところを読むこびが得られずに投げ出し、帰国後も積んどくの山に加わった。

それでも、どこか気にはなっていたのだろう。十年ばかりのちその本が『シャルル・フリーエ伝——幻視者とその世界』（ジョナサン・ピーチャー著・福島知己訳）という翻訳書になったとき、ためらわずに購入した。ただ、やはり手つかずのままであったのが、二〇〇三年にヴェネツィアからスーザ、ジュネーブを経てリヨンへ抜けるという伊・スイス・フランス国境を縫う旅を企てたとき、下調べの一助にと読みにかかり、今度は翻訳の出来（訳者が一橋の大学院生というのに驚

嘆した)にも助けられて、別の本のように惹きつけられて読了、店主が「リヨンの」といったのはこれかと思ひ当たるいくつかの発見があった。

フリーエのどこがリヨンのなのか、リヨンのとは何か。

じつは彼、リヨン生まれではない。ソーヌの源流、スイス国境に近いプザンソンの裕福な商人の家に生まれ、九歳で父を亡くしたあと、

一七九一年、十九歳でリヨンの織物卸商のもとに徒弟として入った。

店の仕事もしながらヨーロッパ中に行商の旅にも出た。しかしやがて彼は、父の遺産を大革命の混乱のうちに失う。フランス革命と、もう一つ産業革命の「二重革命」の混乱の集約点のようなリヨンで、彼は自己のブルジョワ階級からの転落と並行して、多くの織物職人の困窮を目の当たりにした。そうした経験の中から次第に、幻想的ともいえる壮大な社会理論をつくり出す。

リヨンが自由な大市に源をもつ商業都市であるということは、自由競争のもたらす害悪面も甚だしいことを意味した。フリーエはその只中であつて自身が非公認の仲買業者として働きながら投機や中間搾取、買占めなどの実態を知悉するようになり、そこから彼の文明批判の根底に、徹底した商業批判を据えることになる。彼の提案したフアラージュというユートピアが農業・工業の生産者と消費者の協同体の形をとるのは、彼が何に期待をかけたかを示すものだ。

他方、フランス革命の前夜からユートピア思想や社会改革の発酵が進んでいた。もともとリヨンは神秘主義思想が盛んで、フリーメイソ

ンなどの秘密結社が商人たちの間に根を張っていた町であつたが、貧困や社会不安、体制の腐敗からユートピアづくりやイリュシヨナリスムといった動きが加速するとともに、食料や薪炭を共同購入する萌芽的な消費者協同組織が育ち始めていた。チーズ生産者の共同組織も生まれた。フリーエのフアラージュはそうした背景から生まれた一面を持つ。

リヨンは旧来の商人権力の支配する「反革命の首都」となり、革命政府側の六〇日間の包囲に耐えたのち降伏した。フリーエは初め革命とその理念に共感していたが、九三年以後は革命嫌いに変わった。彼にとつて革命は無用の混乱・破壊を生んだだけでなく、それが抱懐する共和主義的な禁欲の理想や「自由・平等・友愛」といった空疎な「公民道徳」そのものが、社会を動かす動因たりえなかつた。人は抽象的な理念によつて動かされるのではなく、情念によつて動かされ結び付けられるところをはるかに大きい。したがつて欲望の解放こそが人間の行動を理解する上で決定的に重要なのに、これまでの社会理論にはその掘り下げがなかつた。

彼のユートピアでは自由とか平等といった虚しい権利ではなく、働く権利、それも現在の社会では不愉快なものとなつている労働を誘惑的なものとする工夫が施される。そのためにはやりたい(興味を惹かれる)労働、ボランティア活動に見られるような仲間意識や名誉心にしかるべき位置を与えることが必要となる。また情念の活動領域は労働に限られるものではなく、食や性の領域についても社会機構を狂わ

せたくなければ、食についてと同様、性、あるいは恋愛についてもすべての人に最低保障を提供しなければならず、フリーエにとつては「もてない」人に恋愛相手をもたせることは、労働権と同じく重要な政治目標になる。

フリーエは労働権が満たされない人に「窃盗権」を認めるとか、調和世界（ユートピア）では過剰生産を回避するためには、その住民は現在の四、五倍は食べ、美食の洗練を極めなければ目標を達成できない、といった一見奇矯な言説を、幾分かはアイロニーを込めてだが、唱えたため、ときに狂人扱いされたり、敬遠されたりもした。熱烈な少数の弟子によつて協同体実験が行われたが、長続きはしなかった。しかし、思想の射程距離は長く、同時代や続く時代より、むしろ二〇世紀後半に入ってロラン・バルト、ワルター・ベンヤミン、ジル・ドゥルーズ、アンドレ・ブルトンといった思想家・文学者によつて再評価されることになった。けれど私は、むしろ彼のうちに、同じくリヨンと深い関わりをもった劇作家フランソワ・ラブレールの破天荒な哄笑を思い起こす。

「美食の都」

食のたのしみへのフリーエの関心は、もしかしたら年長の縁戚に当たり、ともに旅をしたこともある、かの『美食礼賛』のプリア・サヴァランの影響があったのかもしれない。サヴァランはリヨンの近在

の出であった。そしてリヨンは人も知る「美食の都」である。

それに不思議はない。一六世紀にカトリック・ド・メディチスがフランス王室に嫁いだとき、このまだイタリアに比べれば田舎であった国に持参した最高の興入れ道具は料理と銀行であり、ともにリヨンにまず定着した。銀行に象徴される経済力はこの地の料理の洗練度を高めた。さらに、交通の要であり交易中心地であるため、四囲の地方、国から多種多様な食材や料理法が流入し刺激し合う坩堝となった。フランスの鶏、シャロレの牛、ナンチュアのエクリヴィス、ドンブの魚、玉ねぎを初めとするローヌの早生野菜、そして「リヨンの第三の河」といわれるボジョレーワインといった豊かな素材は豊かな料理に開花した。

でもこういふ声もある——「リヨンはグルメの街というが、市内には三つ星レストランがないじゃないか」と。

たしかにポール・ボキューズもトロワグロもアラン・シャペルも、そしてかつてのピラミッドも街から外れたところにある。ロアンヌにあるトロワグロなど、約八〇キロ、泊まりの設備を持つほどの距離がある。しかし、三つ星レストランがないという、そのことにこそリヨンの食文化の本当のつよみ、よさがあるともいえる。

リヨンで街の人々や観光客を悦ばせるのは高級レストランよりは、「ブーション」(bouillon)と呼ばれ、土地の伝統料理を出す現在三〇〇軒に及ぶ、多くは家族経営の小さな居酒屋、めし屋なのである。

そこでは「マシオン」といって、かつては絹織職人用の朝飯も出され

ていたぐらいで、庶民の日常とつよく結びついていた。ミシュランでは認められなくても、フランスではミシュランに劣らぬ信頼をかちえているガイドブックのゴー・ミヨールでは高い点数を稼いでいる店が少なくない。「パリではふらりと入るとまず外れだが、リヨンだといては当たりだ」とリヨンは誇らしげに言う。プーシヨンの店主たちは意欲的で「真のリヨン・プーシヨンの会」なる組織（登録商標あり）を結成、なかには一八世紀以来の店もある。

フリーエが仲間の知識人と語らった「古い街角」(Le Vieux Coins)という店は、おそらくプーシヨンであつただろう。パリ辺りならまずカフェということになるが、リヨンにもフリーエにも、カフェよりはプーシヨンのほうがよく似合う。彼らはリヨン風サラダや川カマスのクネルをたっぷり食べながら談論風発、ファランジューでの食生活を語りでもしていたことだろうか。

そういえば、名物の一つ、タブリエ・ド・サプール(牛の第二胃のカツ)は「工兵の皮エプロン」の意味であり、第二帝政期の頃の形状から命名された。代表的なチーズ料理セルヴェ・ド・カニユは「織物職人の脳みそ」であり、プーラルド・ド・ミドウィユは丸ごとの肥鶏の白い皮と肉の間に黒トリュフを差した格好から「半喪服の鶏」と名付けられた。ついでながら、プーシヨンとは居酒屋の軒先に看板代わりに吊るされた、駅通馬車の馬に食べさせる藁束である。マシヨンは英語でいえば「バイト」(bite)、「噛む」からきた言葉で軽食を指す。前に紹介した「大食らい団」などの団体名もそうだが、こういう

自由な自己表出ぶりも、「良質は深く蔵す」と瀧澤敬一が評したりヨンの反面であり、フリーエの、数字マニアぶりなどに表われた独特の言い回しやユーモアはおそらくはこうした空気の中から生まれたものではあるまいか。

リヨンを通り抜けた人びと——何がリヨンを造ったか

この文の初めにリヨンは美しいと言っている街と、私は書いた。都市の美しさの条件にはどんなものがあるだろうか。それはたぶん美人の条件と同じで、まずは造作、つまりは顔・姿かたちである。山や丘、川や海の有無や配置は骨格に当たり、適度な起伏、変化、土や樹の色や質感がそれを支える。

リヨンはフランスを代表する二つの大河が二つの丘に衝き当って南に流れを変え、Y字型に合流するまさにその地に生まれた。東からのローヌ河はクロワ・ルースの丘に、北東からのソーヌ河はフリヴィエールの丘に当たって、南に向きを変える。それぞれの道具立ても大ぶりで、性格がくつきり分かれている。ローヌはスイスアルプスに発するフランス随一の流量の大河で、ル・ローヌとあるとおり男河であるのに対して、ラ・ソーヌはウォージュ山地から出たおだやかな流れの女河で、リヨンの上流一帯はフランスでも有数の別荘地になっている。二つの丘も対照的で、フルヴィエールが、ペストを防いでくれた聖母に感謝しての「祈りの丘」としてすくくと立っているのに対し

て、クロワ・ルースの緩やかに広がる坂の町は職人・親方の工房と住居の密集した「労働の丘」として知られる。

これだけお誂え向きの景観要素の組み合わせはめつたにない。実際、たとえばフルヴィエールの丘の中腹にあるホテルのテラスからの、遠くはモンブランにまで及ぶ赤瓦屋根の街をさむ二本の河越しの大観は、「王国」から「帝国」へとつづく国原の「国見」の気分を満喫させてくれる。リヨンが三つ星の観光対象を二つの美術館しか持たず、二つ星の教会さえも持たぬのに、街全体としては三つ星都市に認定されているのも、世界遺産の街となったのも、なんとなく納得できる気分になる。

こうした大きな道具立てだけではない。広場、塔、露天市、並木通り、路地といった人工の、いわば「小道具」の役割も都市景観には重要である。トラブルといった特異な小道具の存在は街の歴史をも動かしかねぬ意味をもった。体制や権威、支配への反抗の歴史をローマのセルヴェルス帝への反乱以来数知れぬほど繰り返してきたこの「反逆都市」とは切り離せない存在であった。ブーシヨンもリヨンの個性をかたちづくる小道具の一つといべきだろう。

いや大小の道具立てだけではない。そこで何が演じられてきたかも大切である。都市を劇場に見立てるなら、そこでどんなドラマが演じられてきたかが都市の「格」——性格や風格あるいは格式——を決める。

美人の条件にも氏索性や育ちがある。つまりは歴史がある。寄る年

波に磨かれ洗われた女性美と同様、古い街の表情にはその経歴の質がものをいう。ところがリヨンの場合は、こういう言い方がゆるされるとするなら、ケルト、ローマ、キリスト教文化の層の厚さという、由緒正しい氏索性が近世以後は貨幣の神マモンの跳梁跋扈に災いされた。近代に入ってから経済都市一点張りの発展路線に古代以来の文化的伝統が消された——少なくとも覆い隠された。

それを象徴するのが古代遺跡の発掘・顕彰である。

フランス最大のローマ都市であり、アウグストゥス帝を初め歴代皇帝が滞在したり生まれたりし、ハドリアヌス帝らによって多くの施設が造成されたにもかかわらず、その遺跡群は長く埋もれたままで、発掘されたのは実に一九四六年になってのことであった。場所もさだかでなく、今日歌劇や演劇、音楽祭に使われている古代劇場やオデオンをまず掘り当てるのに一三年を要した。貴重な過去がこれほどまで長期間閉却されてきた例は、これほどの大きさを持つ歴史都市には珍しい。歴史を持ちながら歴史意識が希薄——美人であるのに美人であることに気付かないのは多分貴重な美質なのだろうが、歴史についての自己認識の欠落のほうはそうは言えまい——「あつけらん」と書いたのは、そこなのであった。

しかし、ここまで見たように、リヨンの歴史をくぐり抜けて、それぞれの足跡を残してきた人々の隊列を追ううちに、次第にこの街を見る眼が違ったものになってくるのに気付く。

それを時代順に並び替えてみると、まずフリーエが来る。フランス

革命と産業革命の「二重革命」の時代の洗礼を「反革命の首都」であり、シルクの産業革命をリードしたりヨンでくぐり抜けた彼の体験と思想を瞥見することによって、この街の奔放不羈な気風と潜在的なエネルギーの巨大な可能性の一端を知らされる。彼の最晩年に起こった絹織工の大暴動を鎮圧するためパリから送られた司令官の息子が少年ボードレルであり、そうした屈折のせいも、リヨンには学校にも教会にも哀しくわるい思い出しかなかったようだ。鎮圧後の暗鬱な工業町、信心と金銭欲の支配すると見えた街を通り過ぎたのがスタンダーとディケンズである。

日本からの旅人となると、明治以後になろう。明治六年六月、ジュネーブで帰国命令を受けた岩倉使節団は急遽マルセイユ経由で帰国の途につくが、そのあわただしい旅程のなかリヨンには二泊して生糸関係施設を見学している。ここは殖産興業をめざす明治新政府にとって必訪の地であったのだ。つづく最初の滞在者は京都からの留学組であり、そのうちもつとも有名な人となった稲畑勝太郎は染色技術だけでなく、シネマまで導入した。

大正期に入るとリヨンの横浜正金銀行支店に二人の文才ある青年が雇われ、その一人が永井荷風で、これはわずか八カ月で去ることになるが、この地の裏町の風情は彼の江戸下町趣味の源の一つになったかもしれない。荷風がボードレルとこの地の関わりを知ったとしたら、どういった反応を示したか、ちょっと知りたい気もする。もう一人の行員であった瀧澤敬一はこの地を愛して定住し、大戦中も「パリは

かりではない」生のフランス事情の紹介に力を尽くした。彼の含蓄に富むリヨン紹介を読むのは学生時代から常に「大人」の悦びであった。

戦後リヨン大学に留学したカトリック作家遠藤周作は大戦下のリオンを舞台に出世作『白い人』で、抵抗運動を素材に取り込み、抑圧側に回った青年の内面劇を描き出した。この構想も、リヨンが戦時中抗独地下運動の中心になり「レジスタンスの首都」と呼ばれた土地でなければ思いついたかどうか。ひるがえって、フランスの著名な作家でリヨンのレジスタンスをテーマとした人がいたであろうか。

リヨン出身の歴史家マルク・ブロックと作家サンテグジュペリは抗独闘争の英雄として、初期キリスト教徒の殉難、やや下ってはローマのセヴェルス帝への反乱をはじめとして無数に生まれた、この街の支配者や体制・権威への長い抵抗の歴史の棹尾を飾るキャラクターとなった。サンテグジュペリの名が空港、鉄道駅といった都市の門に採られたのは、反抗の伝統への誇りのかたちで、この都市がようやく歴史認識に目覚め始めた兆候と受けとるべきなのだろうか。